

朝五時真岡に着き、十一時まで外で待たされ十二時近くに収容所へはいました。そのとき乗船のため収容所を出る人と入るわれわれ大変な苦勞をしました。引揚時の荷物は一人六キロでしたが、あまりの苦勞に命が大事と皆投げました。ところがロシアの人がトラックに山のように積んで運び去りました。情けないやらくやしいやら涙も出ませんでした。引揚船は十五日間も入港せず収容所で待機しました。

その間男達は皆ニシン場に連れて行かれ働かされました。やっと引揚船北進丸入港、五月三日函館に上陸しました。苦勞して持って来た金は使用出来ず一家五百円支給された。その金で親戚のいる芦別町（函館から四百キロ）の営林署で働き（冬期間は休職）六十八歳まで働きました。退職後は学校の小使などして暮らしました。子供達も成長各々家庭を持つことが出来ました。

今までお世話下さった皆様に厚くお礼申し上げます。
有難うございました。

燃える恵須取

北海道 大木 義人

私は、昭和十五年徴兵検査を受け、直ちに兵役免除（下肢障害）となり引き続き在学中に国家総動員法に基づく大学、高専等に対する徴兵猶予の廃止、学年短縮令等々の実施により私も六か月卒業期間を短縮され、昭和十七年九月卒業とともに、既に就職が決定していた出版会社に就職、学友は陸海軍に入隊し短期間で初級将校として第一線に投入されて行った。

言論出版等に対する検閲等も一段と厳しくなり、物資の統制により印刷用紙の入手もいよいよ困難となった。加えて企業整備令により私の勤める小出版社は、ついに昭和十九年春大出版社に吸収閉業やむなく私は、宗谷海峡を渡りの母のいる恵須取での生活を余儀なくされた。

昭和二十年八月八日私は、西棚丹三井炭鉱職員寮でソ連参戦をラジオニュースで聞き、恵須取行のトラックに

便乗し、帰宅する。

途中キラキラと太陽を反射して光るソ連機を発見するたびにトラックの運転手の屋根をたたいて運転手に知らせ、トラックを避難させながらの走行であった。

塔路の飛行場手前でソ連機が数機飛行場目がけて盛んに急降下で機銃掃射、道端に車を急停車させ、ソ連機の飛び去るのを見とどけ飛行場近くを通過してながめたところ何とソ連機は、模造の飛行機教台に機銃掃射を加えて行ったのである。

恵須取についたときは人影もない夜となっていた。キーンという金属音をたてたソ連機の爆音がきこえるのと同時に空襲警報のサイレンがびびきわたった。

やがて照明弾が数個投下され、市街は真昼のように明るくなり、右手丘の上の恵須取無線局の大鉄塔二基がくっきりと不気味に銀色に輝いた。

この昼間のような明るくなった市街へ、通称「モロトフのパン籠」といわれている焼夷弾が投下されはじめた。これは親子焼夷弾で、本体が割れて、沢山の子焼夷弾が散らばって落下するもので、木造の住宅はひとたまた

りもない。市街は炎につつまれ、その間をソ連機が銃撃するという危険極まりなく、そのもえる炎をうつつして赤く立つ神社の右の鳥居や、獅子の台座をぐまぐる廻りながら銃弾をさせている自分に気がついた。このころ樺電の一部も破壊されたらしい。

ソ連機が去ったのをたしかめ防空壕へ行き、母と妹や近所の方々の健在を確かめた。

壕の入口付近には、陸軍の曙部隊の兵隊十人くらいが陣どり、机上に無線機が教台ならび仮設のアンテナが立ち、コトコトコトコトと無線のキーをたたいているのが急迫した、その壕の空気を伝えていたのが、今も印象に残る。

この大防空壕も日中だけは扇風機も廻り壕内の換気をしていたようであるが、この扇風機もとまり、壕内は換気不十分なため大変息苦しく、空襲の合間を見て奥の人達が入口付近にでて深呼吸をするという事態で、奥の方はローソクの火も消え、マッチをすっても瞬間的にシュッと白煙をたてるだけという酸欠状態であった。

壕の入口近くにいた某さんの姉さんは長い間胸の病で

あったので、この酸欠では大変である。「苦しい、苦しい早く殺して……」と弱々しい声をだしておられたが、遂に壕内で死亡、このさまはいつまでも私の脳裏から離れないであろう。

八月十二日のソ連の空襲は、警報サイレン吹鳴のいとまもないほどはげしく、燃えさかる市街の炎、船、人間に小山のように野積みされた米俵が真赤な炎をあげ夜空を赤くそめ野積みされたドラム缶がすさまじい爆発音とともに空中に舞い上り、つぎつぎと誘爆炎上するさまはこの世の終りかと思われた。悲惨な情景はたとえようもなく、浜市街本町地区は南浜町を除いてほとんど焼けつくした。

十二日夜半か十三日の明け方かはっきりしないが、間宮海峡上空やや南西寄りの空に突如無数の流星があやしくもまた美しく流星花火のように飛び散り、壕入口付近にいた私達はこの空の饗宴に一瞬われを忘れていた。

十三日早朝、役場からの命令が伝達された。老人子供等を上恵役取方面へ疎開させることになり、母と私はこれに従うことになり、妹は守備隊へ食糧爆薬等の補給に

従事することが決定され、親子三人水盃でお互いの無事と再会を祈り、疎開する者、軍と行動を共にする者それぞれに別れた。これが今生の別れになるかも知れないと思いが脳裏をよぎる。

沼の端のU字型の防空壕の人口近くまで来たとき突如として、丘の上に布陣する警備隊の重機関銃のドドドド……という発射音曳光弾がオレンジ色の点線となって海上沖合へつらなって飛ぶ。疎開中のわれわれは急いで近くの防空壕に飛び込んだ。

間もなく轟音とともに小刻みの振動が続き、壕壁の小石や土砂があちこちから落し生きたこちがなかった。ソ連の艦砲射撃が始まったのである。

幸い壕に大きな異常もなく、全員無事、ソ連軍の上陸もなく、艦艇の去ったことをきかされた。

山市街入口付近に達したとき、恵須取中学の生徒が道路交差点ほぼ中央に重機関銃を備え銃口を海上方面に、むけ警戒している等ものものしく、緊迫感が伝わってきた。

これからが内恵線七十数キロの樺太中央山脈を越え

る、いわゆる「死の内患道路越え」になるとはこの当時
誰もが考えもしなかった。十五日の終戦も知らず、あ
でこぼこの悪路を避難民はひたすら、機銃掃射にさらさ
れ、疲労と空腹、延々と避難の列が続いた。

内路駅からの鉄道による南下引揚げはソ連軍の命令に
より中止となり、各々、復帰することとなった。

ソ連軍の占領、ソ連軍の移住、やっと昭和二十二年六
月北海道へ引揚げたのである。

引揚者体験記録

北海道 松川正吉

私は留萌市の出身です。昭和十一年八月頃旭川師団か
ら除隊になりましたが私の家は漁業で当時まで私の父は
鯧魚をしていたのですが当時の鯧魚の業者は春三月頃か
ら七月くらいまであさりをして又明年の春まで漁期を待
つという漁業でした。

当時は鯧魚も不振になって来ていたおりでもあり、海

外へ勇躍するような気分で知人を頼り樺太の大泊の水産
加工場へ出稼ぎに行き漁業の状況を調べて帰り翌十二年
三月五屯内外の発動機船を岩内港から備船して大泊へ向
け出港したのです。

その時家族を説得するのに大変でしたが母親も前年他
界しておりましたので父親と兄夫婦と弟と五人家族でし
たがまさに冒険といわざるを得なかったのですが、その
年は幸にあさりに恵まれ樺太へ来た甲斐があったと喜ん
だ次第でした。

それからは冬の結氷期を除き年間本当に昼夜の別なく
働きました。お陰で年々実績も揚がり自己船も買い求め
又住居も新築することも出来、十七年春知人の紹介で道
南の江差から妻を迎えた次第でした。然しそれから間も
なく兄が応召となり翌十八年七月二十二日南支の戦場で
戦死し兄の家族は北海道へ引揚げたのでした。

その後戦況も悪い方向に進んでいた二十年七月現在居
住している沙留の知人からの連絡で当時は帆立漁も私船
でしたので私に動力船での漁法の指導に来てほしいとの
依頼があり丁度休漁期であったので沙留へ廻船したので